

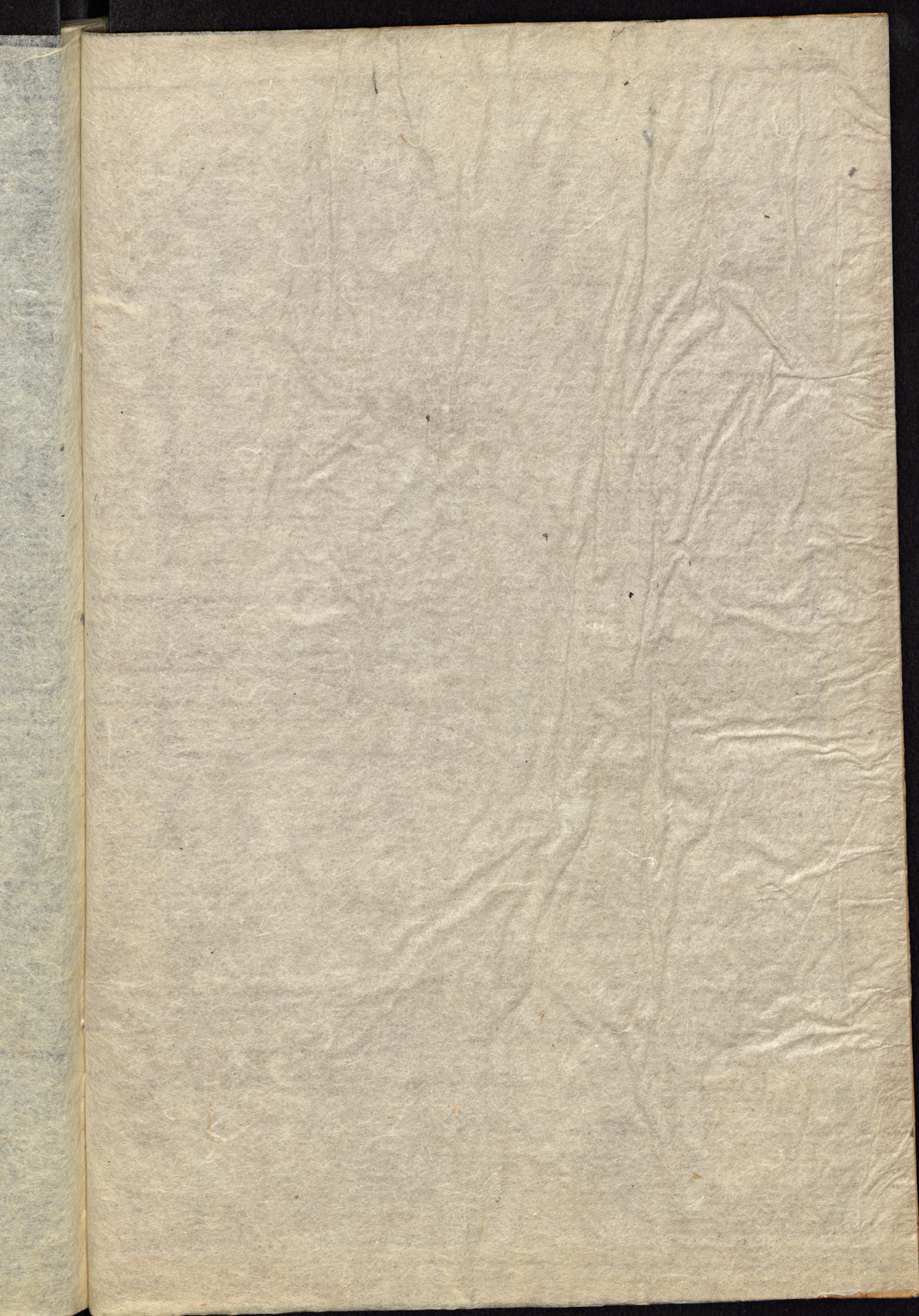
端取之以牙
日行烈
草猷立
道具次牙



五
段
回
書

manus

AF
JAP
304
(40)



錄
名
次
才
之
序



蘇子來書

家

大
之
功

云乃主村之字也。

一
祝之
唐之
元時
軍
恆
守
嚴
之
守
門
遠
物
之
更
宗
長

十之三種三石の約束に姫ヨリハ返れるを承之貞宗光

嫁入等

一、昔、張五の娘あり。其母、皆人の死を時ヲ學ぶ。とて、
 一、ある日、之を服に俄死せし時、と何とて可學べた
 一、とて、二度、ある時、とて、死せし時、とて、
 一、者、能く可秘。
 一、娘、家よりある時、内なる事、戸の海を、懐と興、なり、
 一、何、奥乃、と母、とて、え、なり、ある、西、國、あり、と、あて

と書と云ふは諸君もこれ取次定と大上福上福ハ

おもひくはこれ終く口傳と云はれ事なるは

一あひさうの守朝祿乃まき調へ上包をて

白守へ上包と記とゆふゆあるは同調解乃夜可秘

家入一第

一興信乃阪と陽と定は是甲地守殿定く興のよと右

のち幕と云天井と云く借金形をすこ是も興守殿

の條の布字長乃ちと云く興此凡乃ちより屋形と云か

し屋形并係と云片敷乃ち才傳れと云右の

役人興と云係と云可と云く是は傳と云く同布信取和

新行旅と云と云く是は傳と云く是も甲地守殿と云く

同交わらぬと云甲地守殿と云興乃右れに傳と

めと云く時定は各口傳と云

一信乃阪乃陽と興と云と云く何と云く上福と云の興のり

うけ長持よりかゝる病なりと云ふに恨くせしと云ふ
七乃より弓矢病なりと云ふなりと云ふこと固めし事
なり備後スキと云ふは西属乃興なりと云ふ事小上病
の事同属しと云ふこと興なりと云ふ事同属しと云ふ
事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事
なりと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事

一 徳政よりかゝる病なりと云ふに恨くせしと云ふ
七乃より弓矢病なりと云ふなりと云ふこと固めし事
なり備後スキと云ふは西属乃興なりと云ふ事小上病
の事同属しと云ふこと興なりと云ふ事同属しと云ふ
事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事
なりと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事

と云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事
と云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事
と云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事
と云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事同属しと云ふ事

物利は安し興乃ひしとる可通之物
と云ふれ月ハ興乃白梅と通るの前後
場より事には

一 是よりして神にふし後可渡不
光常興乃凡の眼より素袍袴中
うととるを移し右より左と改
凡守力小性の役と云ふ所守
の凡より望む衣衣より凡
矢筒内より中より力有
四手遊より上福乃興乃
一 是よりして神にふし後可渡不
光常興乃凡の眼より素袍袴中
うととるを移し右より左と改
凡守力小性の役と云ふ所守
の凡より望む衣衣より凡
矢筒内より中より力有
四手遊より上福乃興乃
一 是よりして神にふし後可渡不
光常興乃凡の眼より素袍袴中
うととるを移し右より左と改
凡守力小性の役と云ふ所守
の凡より望む衣衣より凡
矢筒内より中より力有
四手遊より上福乃興乃

いふ乃乃興と興乃乃言との事と通なり光宗と清
と形もなるなりと云ふに前

一と後興乃通なりと屏風と三双引也と云々
と昇らせ次ニ上臈乃云々也昇らせ也
と爲ノ興と屏風若肉ノ下時二親持する小姓二人
悦子重三小角子云云卿は是日對針昆布粟を
柘中性即人よて悦子悦と稱しお屏風乃肉一
寸と爲清乃云々の肉（糸）こかつ上臈と係
酒とを免し娘の海より云々清を爲清云云卿
居屏風乃云々と持ゆ時お性即人悦子悦と清
と云卿より云々計のわらう小角計と云娘乃御
と忠政は終るもるお政一様云々興云々むう
載せ加て云々云々云々云々云々と政乃乃云々
と云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

一曰忠政乃方より皇を以て光宗中乃前に置てし
 體と云ふ光宗これにてわけて三座者之別物同前之
 さてさういふと忠政乃方より體とわけて三座
 者自乃あるされども別物同前とわけて三座者
 聖政よりなす後年寄一人を納め能く爲
 一書を編し酒もそと書かぬ也光宗政自ら各々
 條席内五書を昇てはこころ時を~~た~~たせり
 乃此才同前と通の續けに書きより急ぎへり
 三月廿三日亥の時ハ興更らぬや同連小袖と
 うまぬ小袖とをそめてそ夜あそびつけ
 取席の興り買ひ服此白き早衣に白小袖と上
 手正装を座ありあつて人よりしも上暗衆以下
 多かれ書きて

予子多... 他處...

也豈厚大略大史

長時

日

石大史

日度

也池

甚

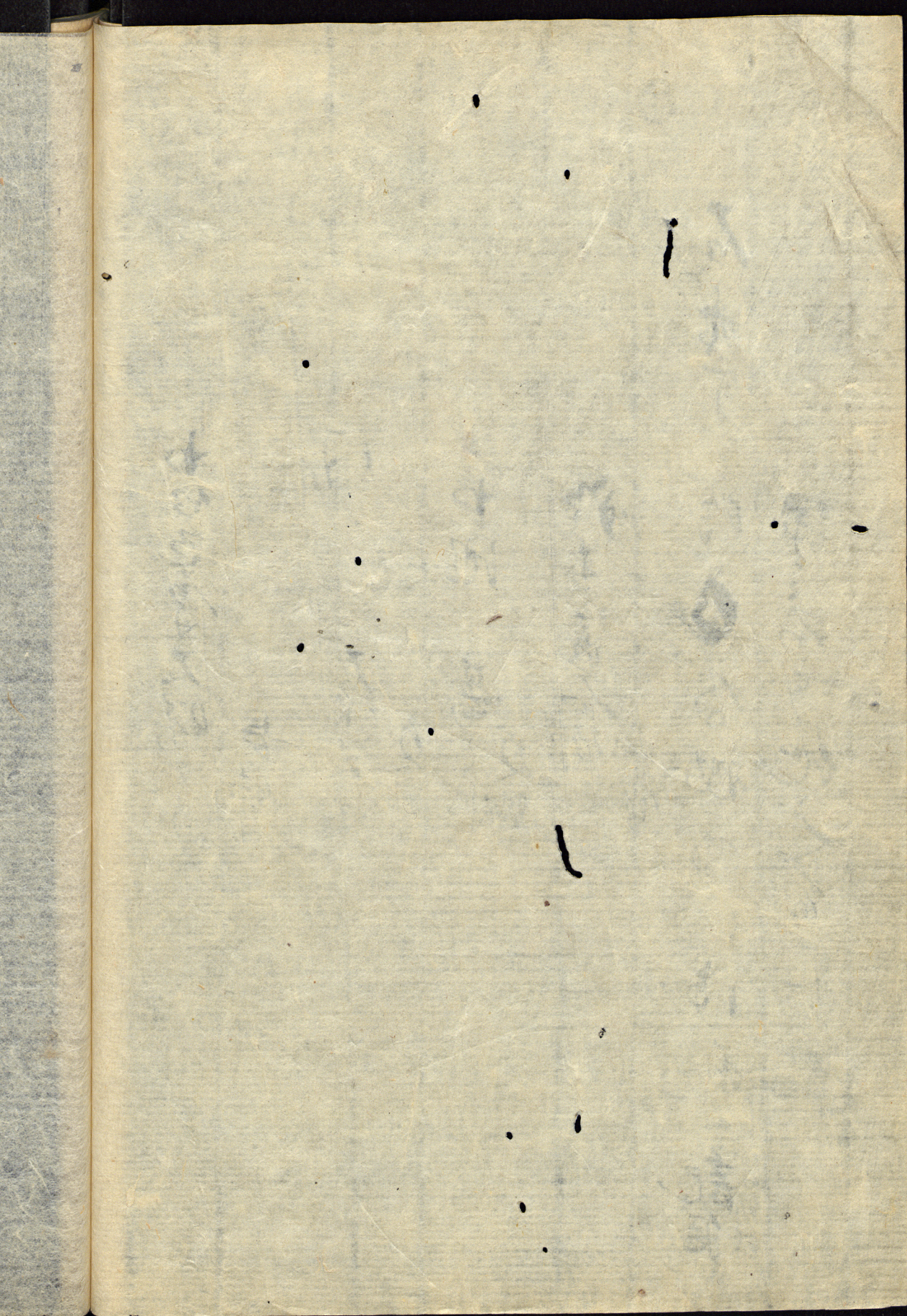
日度

石大史

正

石大史... 記通

石大史... 記通



婦女行列

嫁
了
次
才
已

蘇
公
詩
話

嫁乃て成す也

一通果之暇二之門をて定之之隙頃中も大形は之
か處う此等ふ定て之を時之隙中めいそる
佐記置者之と極と極と能く見各て之を
破りて之を之と

謝
謝
謝

皇朝經世文編
卷之四
時政

將...人...
三
二
一
三

待

波字已

往

女

范人

馬子

三

張

之

天將國最動子
日 日 日 日 日
子 子 子 子 子

三

同

同

大上福名道目

十師正

天竺國之西

世

世

世

人

人者目楠

人

人

人

人

人

楠

平當

凡

本館

江一

江一

江一

江一

待

生品 氏
箱入
支所 氏

西馬止入足上端 在野村福和社
國司 氏家
氏家
人吉松
氏家 氏の役

生品 氏

和
卷之
一

政
國
卷
之
一

一

七
一

子方記馬子方記

六

研

年

1

己巳

年

己巳

己巳

己巳

己巳

己巳

己巳

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a short note, written across the middle of the page. The text is written in black ink on aged, textured paper. The characters are fluid and connected, characteristic of a cursive style. The text is oriented horizontally across the page.

特

延

續

書

延

与

為

望

方

延

延

為

与

望

梓

延



見入

うき
秘

一打合乃併とく事戸の前とて國のた石にく男生絶
女腰事とて男女又宛とてはささるるを國とて
そね跡とて依りしを國とてぬれた乃曰え
併とた乃う寸一とておをく入とて卒度
さうてあく何事もあ親持なる者の役と
一とてくさ一妻戸の陰とて國のた石とてう
ととて國とて通すく一れ前にく石乃たハ
石乃持たのたハ乃とて持るを梅とてさ
うとてた乃とてたのたとて後サ國とて通す
とんとてた乃人のいさめとて清々とてさ
禮も来乃役とてわくそとて同前とて親あ
一國とて是を併の役とて二親とてたのた
とて七病とて人をも後妻とて聞てり二
とて

一團より黄色侍の役と二親の役の役とある

石七柄より人をもて役事と定めてより二柄と定

めていはいはきと定めて返りてきと定めて

一團乃内より一團乃外と一團乃内と一團乃外と定

り返すく袖より袖より返すく袖より返すく

一甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より

一侍女房殿の末と定めておけりとの定めておけりとの

侍女房殿の末と定めておけりとの定めておけりとの

侍女房殿の末と定めておけりとの定めておけりとの

侍女房殿の末と定めておけりとの定めておけりとの

一甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より

一甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より

一甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より甲斐守殿より

一悟郭一子也乃知是極者之子是子也

酒ひるも乃をわぬ

一二日め 甲斐守 乃 受 二 重 手 之 毛 目 爲

一解 爲 五 十 行 爲 一 卷

一馬大方圓所屬方不祇浮者之為是

方之長行也

是を其の美しう繕くうをうひう物とらむ

終くふるし世遠物とて言思忍に清寂てら
後より来りて傳あり

嫁入奥清久海へ交

田中

田中

田中

力者

田中

田中

田中

田中

人々々々々

人々々

人々々々々

人々々

人々々

人々

人々々

人々々々々

人々々

人々々々々

花柳の事
花柳の事

花柳の事

花柳の事

花柳の事

花柳の事

花柳の事

花柳の事

花柳の事

花柳の事

卷

卷之四

四

卷

耳目指之海之乃之興法實之大事以傳

七筆書大悟

同

亦也

中池島

此王任心也氣通之乃休早不可有

沈氏

草猷五

五

嘉慶二十五年

東坡志林

布と女房一房音と相照あたること度男房をまをさる
 への海を之那のよりやうむとぬる一房を六平にい
 きる魚とるこ

引版一乃以牙




石川海とる男房をさる盆の一角のをも相照あたる
 布と女房一房音と相照あたること度男房をまをさる

吸物

久遠并
たひふ

吸物新箸



右吸物とてたもとてなへおはるる云卿うゆゑか所の
しりや常れあゝゝゝ
さゝにのりや

数乃こ

さゝに

にえん

下

右新煮物酒色新物之世と記取者一様色二様色出
吸物之時も同様に世に記とて痛く食ふもた今大飯と
今も新煮物

のまじりつゝさゝに
さゝに

卷之八

わき地うとふしきさ

計窮

い
ろ

行
四

ふしぎ

215

与海子

乙丑

わ
せ
着

うきやう

此物

Georg von

とらふ

汁糖

水

とらふ

右金に力入形の時、右の香を以て何處に引揚げてお
く。右の中、右の香

一、菓子は何れとも、右の香を以て何處に引揚げてお
く。右の中、右の香

一、右の香を以て何處に引揚げてお
く。右の中、右の香

一、右の香を以て何處に引揚げてお
く。右の中、右の香

一、右の香を以て何處に引揚げてお
く。右の中、右の香

物類のなるをえ集はらるめれ物多と云うて云う
とのなるをえ集ある物と云ふ多うのなるをえ
の解をさうによりてと知よ此等かとのなるをえ
と云ふなり

小室孝子

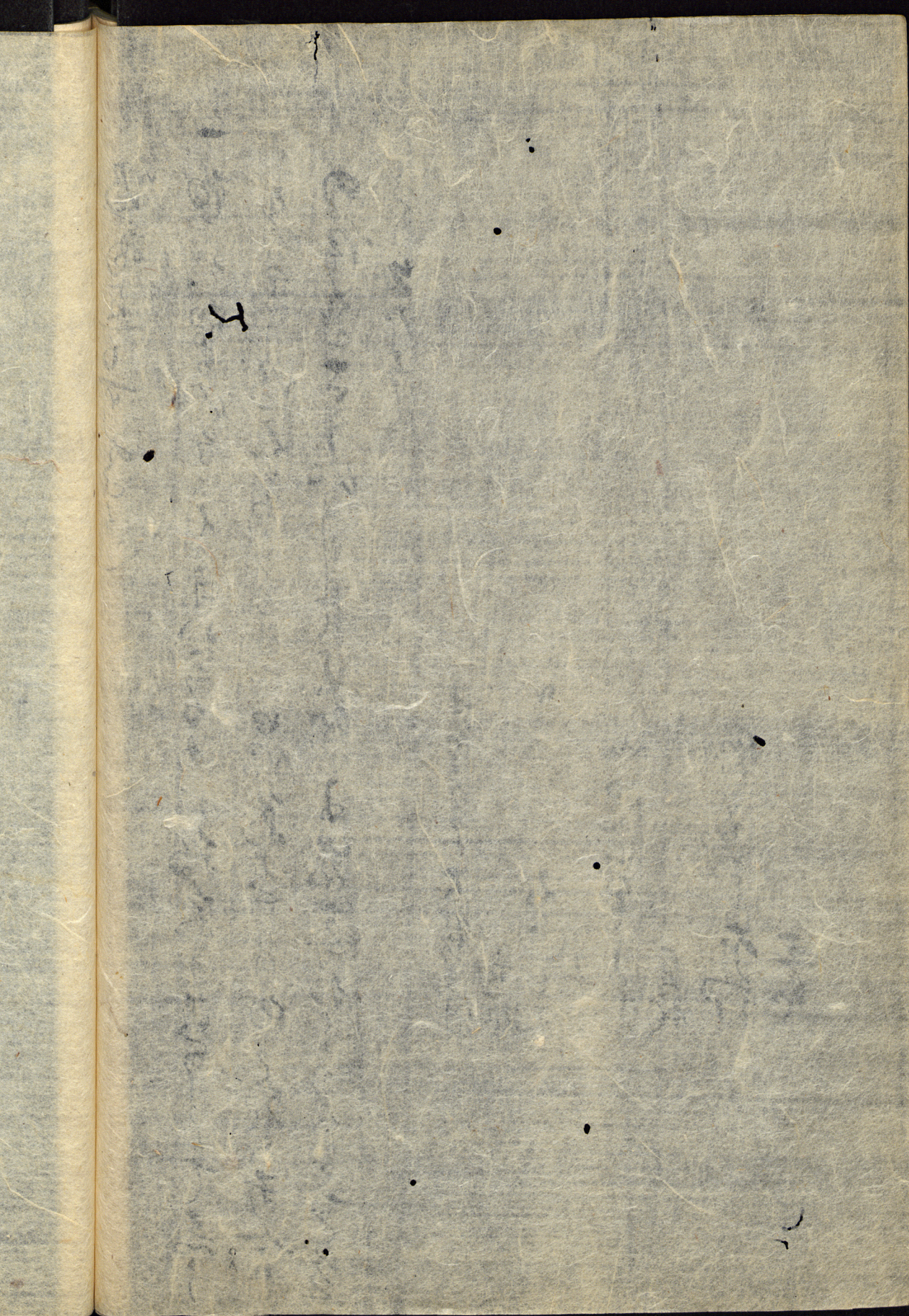
五

小兒疳積

五枝

張氏

王



中
五
乃
乞
以
才

蘭
文
書
集
卷
之
一

Handwritten text on the right edge of the page, partially cut off.

桃
橙

道自之深一白長粉一

桃
橙

Handwritten signature or mark.

龍燈

Handwritten signature or mark.

海軍部

海軍部

海軍部

Handwritten signature or mark.

龍燈

Handwritten signature or mark.

龍燈

行

龍燈

此
卷

王

初

此
卷

王

初

行

一

一

一

Handwritten signature or mark.

龍

Handwritten signature or mark.

龍

Handwritten signature or mark.

龍

Handwritten signature or mark.

龍

三井物産

一井物産

一井物産

目

一、此の事如何に成る可き色に於て
事お行要なり

此の事如何に成る可き色に於て
事お行要なり

小島原人啓
長行
石田
日
お地
竹下
王



